

2006年9月17日

福祉について考える

大網白里町社会福祉協議会 阿部哲夫

福祉と言うことで何か書け、と言うご要請である。

この福祉という言葉、簡単なようでありながら、考えてみると案外漠として難しい。

広辞苑によると、先ず幸い、幸福の意とある。宗教的に言えば、消極的には生命の危急からの救い、積極的には生命の繁栄を意味する、とある。

戦前はいざ知らず戦後に限ってみると、昭和30年頃には日本は戦争を放棄し、福祉国家の建設を目指すのだ、と言う掛け声が日本中に満ち満ちていたように思う。揺りかごから墓場まで(国が責任を持つのだ)、と言った明るい政策が、左右を問わず全ての政党から打ち出されていた。

所謂欧米の福祉先進国と言われる国々のなかには、既にそうした福祉社会が実現されつつあり、皆で頑張れば日本でもいずれ現実のものとなるのだ、と言った明るいレポートものがメディアをにぎわせていた。国民は、一生懸命国のために、企業のために働いていれば、我々もこうした幸福な生活が得られるのだ、と半ば信じ始めつつあったように思われる。

ところが10年前位からだろうか、グローバリゼーションとか経済の自由化と言ったことが強調されるようになった頃から、その潮目が大きく変わった。

それまで“全部私たちに任せておきなさい”と言って胸を叩いているように見えた政府とか企業が、一転して国民とか従業員に“自己責任”と言うことを強調するようになった。老後の幸せはお前さん自身の責任だ、病気にならないようにするのも、生活に困らないようにするのも、自分の責任だ、政府に頼るな、企業に頼るな、と言うことになってきている。

そうした日本の動きに先行して、アメリカのブッシュ政権のグローバリゼーションの動き、自己責任の動向が盛んにメディア登場する。福祉を売り物にしてきた政党も若干腰が引けつつあるように見える。

ただ変わらないのは、増税の必要性を強調する動きだ。

国民の立場からすると、福祉を政府が保証すると言うから、増税もやむを得ないかと考えてきたが、国が福祉を保証しないと言うなら、我々も国の増税要請等には応じられない。国は先ず福祉以外の支出を抑えることを考える、と言った声が国民の間から聞こえて来ても不思議ではないのではなからうか。

以上